

令和8年度 第1回 学びの多様化学校設置に係る有識者会議

開催日時：令和8年6月1日（月） 午後2時から午後4時まで

場 所：教育委員会 教育委員会室

出席者：学びの多様化学校設置に係る有識者会議委員

野秋 愛美（教育長・委員長）

武井 敦史（静岡大学 教授）

太田 正義（常葉大学 准教授）

諸田 嘉人（天竜厚生会 健康医療課長）

小粥 義雄（NPO 法人すまいる はままつ子どものこころを支える会 理事）

南瀬 悦司（内野小学校 校長）

鈴木 公一（中部中学校 校長）

:アドバイザー

黒沢 正明（文部科学省学びの多様化学校マイスター）

議事内容：

- 1 開会
- 2 教育長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 副委員長の選出
- 5 説明

令和8年度浜松市学びの多様化学校設置に係る有識者会議 議題（案）について
浜松市の不登校の現状と支援の取組について

- 6 協議
 - (1) 浜松市の学びの多様化学校の位置付け等について
 - (2) 浜松市が目指す学びの多様化学校の姿や学校づくりの視点について
 - (3) 対象の範囲、学年、設置形態・場所等について
- 7 連絡事項
- 8 閉会

会議録

(鈴木教育総務課長)

定刻となりましたので、ただいまから令和8年度第1回浜松市学びの多様化学校設置に係る有識者会議を開催いたします。本日はご多用の中ご出席いただきありがとうございます。初めに、野秋教育長からご挨拶をいただきます。

(野秋教育長)

皆様こんにちは。教育長の野秋です。本日は有識者会議にご出席いただき誠にありがとうございます。不登校の議論の前に、今年度2年目を迎えた「第4次浜松市教育総合計画」に触れさせていただきます。本計画は基本理念を「描く夢や未来の実現」とし、主体性・多様性・包摂性、信頼・協働の三つのコンセプトのもと教育活動に励んでおります。特に「多様性・包摂性」は、外国にルーツを持つ児童生徒が多い実態や、課題を抱える子供たちと共に学校の在り方を真摯に考える重要なコンセプトです。一人ひとりが自分らしさを認め、互いを尊重し合って活躍できる学校と浜松市を目指す願いが込められています。

不登校支援は、政策2「多様なニーズに対応した学びや支援の充実」の施策です。様々な支援を行ってきましたが、全国同様に本市でも不登校児童生徒は増加しており、令和7年度は前年度から約100名増の2,855人となりました。既存の学校の枠組みで生きづらさや学びづらさを抱える子供が多く存在することを重く受け止めております。そこで、多様な学びの場の一つとして本市の学びの多様化学校の在り方を協議いただき、令和10年度以降の開校を目指したいと考えております。

設置意義は大きく二つあります。一つ目は、児童生徒と保護者の明るい未来を拓くことです。一人ひとりの特性や状況に寄り添ったきめ細かな学びを提供して継続の機会を保障し、自分らしく学び、将来の夢や希望を描き、志を育む場にしたいと考えます。二つ目は、多様な学びを創出する重要な拠点となることです。新たな学びの選択肢が提示され、それが市内の全学校に広がることで、教職員の資質向上や教育力の底上げを図りたいと考えております。いずれは全市立小・中学校が多様な学びの機会を提供でき、子供みんなが主役になることが理想です。困難を抱える子だけでなく、これからの社会を生きる全ての子供たちにとって、学校が希望を持って学べる場となるよう、協議を進めてまいります。

本日は、第一線で活躍されている皆様から、専門的な知見や現場での経験に基づいた忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

(鈴木教育総務課長)

それでは、議題「3 委員紹介」に移ります。本日は学識経験者、関係団体、学校代表の皆様にご出席いただいておりますので、一言ずつご挨拶をいただきます。

(武井委員)

静岡大学の武井です。教職大学院で現職教員を指導しています。不登校問題には深く関

わっており、2009年には共著で不登校に関する本を出版しました。私は、不登校は学校が変わっていく最先端の現象だと考えています。マクロ視点で見ると、現在の教員養成や指導要領は単一のシステムですが、子供は多様化しているため、一つのシステムでは通用しなくなるのは当然です。当時、フリースクールや親の会、適応指導教室など様々な関係者と話し合いましたが、立ち位置によって見える光景が全く異なりました。フリースクール側は「学校や教育委員会は話を聞いてくれない」という被害者意識になりがちですが、適応指導教室では「いかに学校に戻すか」が主眼となります。それぞれが善意で最善を尽くしていますが、見え方が違うのです。これからの教育にはその多様性を生かす状況が必要と考え、大学が仲立ちして腹を割って話す場を設けました。お互いの強みや弱みを理解し、それを子供に一番近い教員や保護者に届けて最適化を行うことが、最も有効だと考えています。国の施策も、単なる学校復帰から多様化を志向する方向へ変わってきました。

学びの多様化学校は、設置すれば自動的にうまくいくわけではありませんが、最適な教育機会を選択するハブとなる大きなチャンスです。教育長の「多様な学びを創出する拠点にする」というお言葉に共感いたします。多様化学校に通える児童生徒は全体の一部ですが、この学校が中核となり、全体の教育の多様性を作り出していければ素晴らしいと考えております。

（太田委員）

常葉大学の太田です。1993年に国の自然体験活動推進の流れで不登校の子供たちのキャンプに関わって以来、現在も毎月キャンプ活動を続けています。大学では思春期の問題行動を研究し、いじめや不登校の深刻化を防ぐ方法を模索してきました。現在、各地に多様化学校が作られ、選択肢が増えたのは良い変化です。浜松市は広大ですので、設置した一つの学校をいかに地域へ広げていくか、その方法を考えながら参加いたしました。これまでの実践や研究の知見を役立てたいと思います。

（諸田委員）

社会福祉法人天竜厚生会健康医療課長、診療所の事務長諸田です。福祉分野からお招きいただき感謝いたします。当法人は、静岡県から生活困窮者の合宿型学習支援を受託しているほか、天竜区を中心に通所型の学習支援も行い、年間を通じて子供たちをサポートしています。これらの関わりや成年後見人等のソーシャルワークの実践を通じて、福祉の立場から感じたことをお伝えできればと思います。福祉と教育が更に連携を深め、子供たちが安心して生活できる浜松市づくりに貢献したいと考えております。

（小粥委員）

NP0 法人すまいるの小粥です。生成AIが普及し子供がAIに相談して行動を決めるような、予測困難な時代において、不登校の子供の心や未来を救う学校づくりの議論に参加でき感謝いたします。当法人は設立から約10年、浜松地域の子供や保護者を教育面で支えてきました。主な活動として、市内11箇所の「校外まなびの教室」の運営を委託されてお

り、私は「ふれあい教室」で日常的に子供たちと関わっています。また、こども園でも乳幼児や保護者、保育士の相談に応じています。日々の活動で感じていることをお伝えし、お役に立てればと思います。

（南瀬委員）

内野小学校長の南瀬です。3月までは教育委員会にいましたが、4月から学校現場に戻り、一人ひとりの子供たちの夢や未来の大切さを実感しています。その未来を支えられるよう貢献したいと思います。

（鈴木委員）

中部中学校長の鈴木です。当校は小中一貫校で、私も3月まで教育委員会にいました。本校ではこの4月から「校内まなびの教室」が正式に始動し、不登校傾向の中学生が数名通っています。専任教員が1名加配され、日常的に子供と関わる体制がスタートしました。学びの多様化学校の設置にあたり、当校の教育課程などの取組が利活用できる部分があると考えております。

（黒沢アドバイザー）

黒沢です。学びの多様化学校マイスターとして各自治体の不登校対策を支援しています。民間出身の校長として12年間、多様化学校第1号である八王子の高尾山学園で校長を務めました。設立当初の理念が年数を経て形骸化していくのを経験し、それを修正してきた経緯があります。持論である「いつか来た道を繰り返さない」を踏まえ、高尾山学園での知見を活かして支援いたします。普段は豊島区教育委員会で教育行政に関わるほか、文部科学省の中央教育審議会委員としても不登校支援に携わっています。

（鈴木教育総務課長）

ここからの進行は、野秋教育長にお願いします。

（野秋教育長）

それでは、進行いたします。最初に「4 副委員長の選出」について、設置要綱に基づき静岡大学の武井委員を副委員長に指名いたします。

続いて、次第「5 説明」に入ります。令和8年度浜松市学びの多様化学校設置に係る有識者会議の議題案について、教育総務課から説明をお願いします。

■資料1 説明（鈴木教育総務課長）

（野秋教育長）

ただいまの説明について確認はございますか。続いて指導課より「浜松市の不登校の現状と支援の取組について」説明をお願いします。

■資料 2 説明（鈴木指導課長）

（野秋教育長）

現状と現在の支援の取組について説明がありました。何か確認はございますか。では、協議に入ります。指導課より「浜松市学びの多様化学校の位置付け等について」説明をお願いします。

■資料 3 説明（鈴木指導課長）

（野秋教育長）

資料 3 の説明について確認はございますか。それでは意見交換に入ります。位置付けや設置の意義について、追加すべき視点などがあればご意見をお願いいたします。

（小粥委員）

教育長のお話にあった「明るい未来」や「社会的な自立」について、今の子供たちが 10 年後、20 年後にどうなっているべきかという長期的な視点から多様化学校のあるべき姿を考えることが非常に重要です。いくら希望する進路に進み一生懸命勉強しても、将来社会で自立できなければ意味がありません。そのため、子供たちの社会的自立を見据えた長期的な視点が必要だと考えます。

（野秋教育長）

社会的自立は目指すべき目標であり、多様化学校はそのための通過点としてどうあるべきかという視点は大変重要です。

（武井委員）

多様化学校は早くて令和 10 年に 1 校の設置ですね。ハード整備が必要で市内に 1 校しか設置できないことを考慮すると、どういうタイプの子供に最もフィットする場所にするかを考える必要があります。設置場所が都市部か、郊外の自然豊かな場所かで学校の性格は相当変わります。不登校全体をカバーすることは不可能なため、どの部分を担い、どう特色化を図るのかをセットで論じなければ、実のある議論にはならないと考えます。

（野秋教育長）

現時点で具体的な場所は示せませんが、社会的自立へ向かう拠点にしたいと考えております。この意義をどう描くべきか、ご意見をいただきたいです。

（南瀬委員）

これまでの不登校支援は「安心できる居場所づくり」が主な狙いでした。しかし、中学

生の進路先は、通常の学級の生徒と異なる現状には課題を感じています。将来を描き進路選択を保障できる学びの場が必要ですが、現在のまなびの教室は安心できる活動が中心で、中学生への学習機会の保障が十分でない面があります。大規模校では教科担任が校内教室に入るなど対応できる場合もありますが、そうでない学校もあります。校内での支援が望ましく、安心できる環境での学び直しを含めた学習支援の体制も大切です。進路選択と「描く夢や未来の実現」を保障できる場として多様化学校が機能すると良いと考えます。

（野秋教育長）

進路や学びの保障という視点でのご意見をいただきました。

（小粥委員）

不登校の捉え方は立場によって異なります。毎日子供たちと関わっていると、不安や緊張が強く、大人を信用できずに学ぶ前提に立てない子供が多いと感じます。そうした子供に、進路や学びだけをクローズアップして支援することは、メンタル面の支援が不十分なまま次のステップへ進ませることになり危険です。まずはその場所で安心し、支えられていると実感できる環境を整えることが最優先です。周囲に守られ安心して初めて学習意欲や進学への希望が湧いてくるものと考えます。

（野秋教育長）

設置意義の中に、心理的安全性の保障も盛り込む必要があるということですね。

（諸田委員）

福祉の立場から学習支援を行っている経験から言うと、子供に教育的に教えることは難しく、私たちは子供同士の成長に期待して向き合っています。信頼できる大人として安心感を与えることはできても、学習指導には限界があるため、子供同士が学び合い成長し合う縦割りのグループワークを取り入れています。高校生が小中学生に教えることで、ロールモデルが生まれ成長が促されます。多様化学校でも、子供に期待し活躍の場面を作ることが重要です。アンケートで「子供同士の話し合い」等の値が低かったのは、評価を恐れる子供が多いからだと考えます。福祉では、まず「できない」ではなく「これはできる」という強みを認めることを大切にしており、認められ、必要とされることで子供は大きく成長します。教育現場でも、他者から必要とされる仕組みを作ることが成長に繋がります。

また、進路未定の残り1割の生徒に対しては、スクールソーシャルワーカー（SSW）が卒業後を見据え、在学中から家族や地域と連携して関わるのが重要です。教員やカウンセラー、SSWの役割分担が分かりにくい面もありますが、SSWの力量が発揮されれば、子供たちの将来の安心に繋がります。子供の成長に期待し、大人が温かく見守る学校になることを期待します。

（野秋教育長）

子供たちが喜び成長できる学校になれば素晴らしいですね。具体的な視点をありがとうございます。

（黒沢アドバイザー）

多様化学校の設置は、単なる一条校を1校作ることではなく、浜松市全体の不登校対策を再構築するプロジェクトとして位置付けるべきです。入口から出口までのプロセスを設計し、それぞれの居場所における多様化学校の位置付け、教員がどう伴走し、カウンセラーやソーシャルワーカーがどう関わるかを設計することが重要です。特に、心の回復を第一に、生活の再建、学びの再開、自立と進路設計という一連のプロセスを一体的に作り上げることが今回の位置付けの目玉と考えます。

（野秋教育長）

続いて、次の協議事項「浜松市が目指す学びの多様化学校の姿や学校づくりの視点について」に移ります。指導課から説明をお願いします。

■資料4 説明（鈴木指導課長）

（野秋教育長）

提示した内容をこれから肉付けしていきたいと考えております。確認事項はございますか。

（黒沢アドバイザー）

視点としてぜひ入れたいのが、まずは「人材育成」です。配置された教職員がすぐに活躍できるわけではないため、どう育成し、多様化学校を拠点として人材育成にどう関わるかという視点が不可欠です。

もう一つは「理念の維持」です。設置当初の理念も年数が経つと崩れがちです。理念を失わないための人材配置や運用の仕組みを最初から組み込んでおく必要があります。全国で開校後に理念が崩れた事例を見てきましたので、運用を見据えた仕組みづくりをお願いしたいです。

（野秋教育長）

提示したものはあくまでたたき台ですので、これから様々なご意見をいただき整理していきたいと考えます。ぜひ何でもおっしゃってください。

（太田委員）

提示された資料の「＋」という位置付けが非常に良いと思います。多様化学校の在籍生

だけでなく、浜松市内の不登校状態にある全ての子供たちに学びを届けるという理念が必要です。例えば、リアルな関わりは校内・校外の教室で行い、体系的な授業は多様化学校から配信するなど、デジタル支援を活用すれば在宅でも学べます。通える子供だけのためではなく、学びをどう全体に届けるかという視点が大切です。他自治体では定員超過で受け入れられないケースもありますが、アンケートでも多くの子供が「もう一度学びたい」と答えています。全員の受け入れが難しくとも、学びを届ける仕組みを視点に入れていただきたいです。

（野秋教育長）

通っていない不登校傾向の子供にも学びが届くような、拠点としての仕組みがあると良いということですね。

（武井委員）

黒沢さんの意見に関連しますが、多様化学校を選ぶ子供は既存の学校に合わないわけですから、完成した姿が普通の学校と似ていては意味がありません。先行事例を見ても既存の学校とは異なっており、通常と同様の理念では機能しないでしょう。

また、人材育成だけでなく教員配置の在り方も重要です。通常の定期異動と同じ形で「明日から多様化学校の先生です」と配置しても、専門的な対応はできません。限られた人数で運営せざるを得ないため、配置の仕組みを当初から議論すべきです。通常の学校と同じ体制で特色ある学校づくりは困難です。

さらに、多様化学校の決定的な違いは、入学後に通常の公立校へ戻る生徒が事実上ほとんどおらず、そのまま卒業するパターンが多い点です。一方、校内・校外のまなびの教室は通常校への復帰が前提です。したがって、多様化学校は不登校全体の一部を担いつつ、求心力を発揮して他の居場所や各学校とのネットワーク機能をどう機能させるかがポイントになります。具体的にデザインする段階で、この点を深める必要があります。

（小粥委員）

学校である以上、特例校であっても学校教育法の範疇でカリキュラムを設け、学習指導要領に則するという縛りがあります。その中で不登校の子供たちの救いとなる学校にするには、サポートする人材の育成や、一斉学習ではないグループ学習などの授業の仕組みづくりが重要です。法律の縛りの中で、運営面や授業づくりをどれだけ一人ひとりに最適化できるか。それが他の公立小・中学校へ波及することを目指し、先進的な欧米の研究なども取り入れていく必要があります。

（黒沢アドバイザー）

現在、全国に84校あり、三つの世代に分類できます。第1世代は高尾山学園に代表される「支援・居場所・伴走型」です。第2世代は「個別探究型」で、既存の枠に縛られず個人の興味を尖らせる形です。両者の最大の違いは進路で、通常の受験を目指すか、受験シ

システムに関わらず個性を伸ばすかです。最近の第3世代はこれらをミックスした形です。重要なのは優劣の議論ではなく、子供自身が選択できるようにすることです。心の回復を望む子にはその課程を、個別最適で好きなことを極めたい子にはその環境を用意するという、子供の選択権に合わせた設計がポイントになります。個人的には、できるだけ通常の受験にも対応できるようバランスを取りたいと考えます。個性を尖らせるのは高校からでも遅くありません。どう教育課程のバランスを取るかが鍵となります。

（野秋教育長）

本市の現状から、中学卒業後を見据えたいという思いはありますが、高校進学だけが選択肢ではないため、そのバランスを重視します。

（小粥委員）

多様化学校の卒業生が10年後、20年後にどう生きているかという研究が進むのを期待したいと思います。開校を待てないのがもどかしいところですね。

（黒沢アドバイザー）

多くの卒業生を見てきましたが、不登校の子供も潜在的には「勉強したい」「友達とワイワイしたい」というニーズを持っています。本人の特性で難しくとも、環境さえ整えばこの2点に尽きます。「学校らしくない学校」をコンセプトにするケースもありますが、学校らしさを望む子もいるため、多様な選択肢が必要です。「どこで学ぶか」ではなく「誰と学ぶか」であり、来て良かったと思える環境づくりが最も重要です。

（南瀬委員）

当校の「校内まなびの教室」には毎日10人ほどが通っています。通常の学級では難しい折り合いの付け方も、この中では自分たちでルールを決め、自分らしさを出しながら活動することができています。支援員が子供の特性を捉えて関わることで成長を促しています。また、私は校長室を開放しており、子供たちが「サッカーをしたい」「バスケットゴールが欲しい」などと直接提案にきます。運営上のルールで難しいこともありますが、実現のためにどうすればよいか、できない理由は何かを子供たちと話し合っています。社会に出ることを見据え、信頼できる大人のもとで主体的に話し合い、思ったことを実現していく経験は、少人数の不登校支援においても大きな成長の場になります。こうした環境が自己肯定感を育み、次の進路を目指す強い心に繋がると実感しています。

（野秋教育長）

自治的な要素ですね。鈴木委員、いかがですか。

（鈴木委員）

子供の声を聴く際、彼らが思いを正確に言語化できているか疑問です。大人の用意した

枠組みに妥協して答えた「ニーズ」をそのまま拾うと、本当の思いとずれてしまう懸念があります。子供自身も何が必要か分かっていない場合があります、大人がそれを見抜く必要があります。保護者の不安も漠然としており、トラブルが起きて初めて具体的な不満に変わることがありますが、それでは根本解決になりません。多様化学校では、子供のニーズを捉えるだけでなく、大人が「こうではないか」と枠を広げて多様な提案を投げかける教育課程も必要だと考えます。

当校では、コーディネーターや支援員と子供がたわいもない話をする中で、教員側から「こうやってみよう」と提案するアプローチをとっています。例えば隣の美術館と連携し、混雑しない時間帯に見学する取組などを始めました。子供が言葉にできない思いを大人が主導権を持って見抜き、先手を打って環境を用意することが大切です。当校の実践からフィードバックできる点もあると考えています。

（諸田委員）

多様化学校に通う子供たちは不登校の事実を抱えています。現場では「なぜ不登校になったか」という過去の原因に向き合い確認し合う作業が必要とされているのでしょうか。それとも、過去も含めたありのままを受け止め、未来を見据えて学び合っているのでしょうか。教育の現場において大人が子供の過去とどう向き合っているのか、その基本姿勢をお聞きしたいです。

（小粥委員）

子供が学校に行けなくなった経緯や思いを深く理解することが重要です。不登校という現象自体を前向きに捉え、保護者にも「これを機に幸せになれるよう支援する」と伝えていきます。子供は安心すると、甘えや怒り、本音を少しずつ表に出すようになり、それが支援の大きなヒントになります。言葉による対話だけでなく、体験活動や教室での自由な遊び、衝突などの活動を通じて本当の姿が現れます。子供を深く理解するアプローチが不可欠です。

（野秋教育長）

問いかけてすぐに答えが出るものではなく、学校も対応に悩んでいます。子供によって状況が異なるため、共に悩みながら伴走していくことが大切だと考えています。

（諸田委員）

目指す姿として未来を描くだけでなく、まずは子供を受け止める姿勢を理念に盛り込むことが重要です。大人側の理想だけで走ってしまうと子供が置き去りになり、途中で方向性がブレる原因になります。最終的に立ち返るべきは子供の思いであり、まずは子供を確実に受け止めるという理念を本市として掲げるべきだと考えます。

（野秋教育長）

目指す姿にその視点が欠けていたと気づかされました。本市の教職員の目指す姿の筆頭
は「子供の自分らしさを受け止める教職員」であり、この学校こそまず実践すべきです。
子供と向き合う姿勢の確認が、黒沢先生の指摘された人材育成に繋がります。どう教員を
配置し育てるかが、市全体への波及の鍵となります。

（黒沢アドバイザー）

諸田先生の質問に関連して、東京などの多様化学校では入級前に必ずアセスメントを行
います。今後、入級や転入の仕組みを議論する際、アセスメントをいつ・誰が・どう行
い、入級へ繋げるかというプロセス設計が重要になります。高尾山学園では、心理士やソ
ーシャルワーカーが総がかりで、入級前から養育歴や家族構成、こだわりなどを丁寧に把
握します。これほど綿密に行って初めて本音が見えてきます。また、子供によって話しや
すい大人のタイプが異なるため、多様な専門人材を用意し、情報を共有してアセスメント
シートに落とし込むことが大切です。入級前、直後、1年後で成長を比較し、KPI（成果指
標）に設定するような工夫も有効だと考えます。

（太田委員）

データに基づきお話しします。コロナ前後に教育委員会と実施した不登校調査（211 組
回答）の分析によると、「社会の意識変化で休みやすくなった」のではなく、子供たちは1
年前から学校への嫌な気持ち（学校忌避感情）をコップの水が溢れるように蓄積させて休
むに至ることが分かりました。この実態を考慮すると、受け止めやアセスメントが不可欠
です。また、集団から一度離れた子供たちが再びステップを踏むためには、黒沢さんの言
う「自分で選べること」が重要なキーワードになります。

さらに内閣府のひきこもり調査では、不登校経験者の20代後半での無業率が通常より高
い一方、良好な人間関係を築けている人ほどその後の状況が良いという結果が出ていま
す。関係性構築の重要性はデータからも裏付けられており、ぜひ視点に盛り込んでいただ
きたいです。

（野秋教育長）

ありがとうございます。いただいたご意見はどれも重要であり、子供たちが多くを得ら
れる環境づくりの視点として大切にします。

時間が迫っているため、次の議題である対象学年、設置形態、場所などの具体的な内容に
ついて、現在の検討状況を教育総務課から説明します。

■資料5・6説明（鈴木教育総務課長）

（野秋教育長）

ありがとうございました。各所の事例を参考に本市として整理した内容ですが、まだ決
定ではありません。確認も含めてご意見をお願いいたします。

（武井委員）

多様化学校は一度入学すると元の学校に戻る可能性が低いため、マッチングが重要です。子供が明確なビジョンを持って入学を希望するケースは稀で、教員も児童生徒の適性を完全に把握することは難しいはずです。一方で転校は容易ではありません。このため試行錯誤が必要です。対応策として、小6時や各学年で「試行的（お試し）に入学できる機会」を設けることが考えられます。

また、設置形態について、分校・分教室の所属校には距離要件がないため、特認校（中等部など）の分校とする選択肢もあります。多様化学校単独の職員数では研究や協議の余力が不足しがちですが、特認校の分校にすれば連携しやすくなります。

さらに、定員の問題も難しく、他市では定員を超える応募があり、不登校状態でも多様化学校にも受け入れてもらえないケースもあると聞きます。通える生徒に限られる中で、誰もが排除されない運営上の工夫について、今後丁寧に検討する必要があります。

（野秋教育長）

本市の広大な地域性を踏まえ、当初場所について言及された太田委員、いかがでしょうか。

（太田委員）

具体的な候補地が未定なので難しいですが、アクセスを考慮して市の中間あたりに位置すると良いと考えます。

（野秋教育長）

場所の選定は市からのメッセージにもなるため、非常に重要だと捉えています。

（黒沢アドバイザー）

全国の動向として、当初は分教室でスモールスタートしても、生徒増や教員配置の必要性から最終的に本校型や分校型へ移行する自治体が多いです。武井先生の言われた「お試し」に関し、私は「教育支援センターとの一体的運用」を推奨します。センターを多様化学校に併設（ビルトイン）し、そこでコンディションを整えた子がスムーズに移行できる環境を作ることで、学校復帰の力を蓄えやすくなります。

ただし、良い仕組みを作ると希望者が急増する傾向があり、不登校数の約10%（本市では300人規模）が集まる可能性があります。高尾山学園でも希望者が増え続け、校長として分校設置を検討しました。

（野秋教育長）

学びの多様化学校の分校ですか？

(黒沢アドバイザー)

そうです。キャパシティが足りなくなり、細胞分裂のように増やせないかと考えました。

(野秋教育長)

本市でいう「校外まなびの教室」を多様化学校内に内包させるイメージですね。

(黒沢アドバイザー)

その通りです。まずはそこに入って様子を見ながら、元の学校に戻る選択肢も含めて判断できます。

(野秋教育長)

その際はお試しということですか？

(黒沢アドバイザー)

ステップアップしたい子への確実な受け皿になります。

(野秋教育長)

一体的運用の方法もあるのですね。今後具体的に詰めていきます。次回以降の協議題「実態に配慮した指導上・施設上の工夫」でも具体的な議論が必要となりますので、事務局でも検討を進めつつ、必要に応じて委員の皆様にご意見を伺うこともあるかと思っています。

時間が迫りましたが、最後に黒沢アドバイザー、一言お願いします。

(黒沢アドバイザー)

成功の鍵は、単なる居場所ではなく「意味のある学びの場」を創出することです。そのためには、教育・福祉・医療（カウンセラーやSSW）の三者が連携して子供を支える伴走者体制が不可欠です。人件費等のコストはかかりますが、手厚い体制を整えるほど子供の成長機会は確実に増えます。三者が一体となった学校づくりを期待します。

(野秋教育長)

本日はキックオフとして、本市に必要な形を定めるための有意義な視点をいただきました。ありがとうございました。進行を事務局に戻します。

■連絡事項（鈴木教育総務課長）

(鈴木教育総務課長)

以上で、令和8年度第1回浜松市学びの多様化学校設置に係る有識者会議を閉会いたし

ます。ありがとうございました。